

——『異界』。

ここではないいずこか、此岸しがんに対する彼岸ひがん、この世から見たあの世、もしくは、いくつも存在し得るといわれる並行世界。それが「発見」されたのはそう最近のことではない。昔から「神隠し」と呼ばれる現象は存在しており、それが『異界』への扉をくぐる行為だということは一部の人間の間では常識とされていた。

だが、『異界』が我々を招くことはあれど、『異界』に対してこちらからアプローチする手段は長らく謎に包まれていた。

そのアプローチを、ごく限定的ながらも可能としたのが我々のプロジェクトだ。人間の意識をこの世界に近い『異界』と接続し、その中に『潜航』する技術を手にした我々は、『異界』の探査を開始した。

もちろん『異界』では何が起るかわからない。向こう

側で理不尽な死を迎える可能性も零とは言えない。故に、接続者のサンプルとして秘密裏に選ばれたのが、刑の執行を待つ死刑囚Xであった。

彼は詳細をほとんど聞くこともなく、我々のプロジェクトへの参加を承諾した。その心理は私にはわからないが、Xは問題なく『異界』の探査をこなしている。

寝台に横たわる肉体を残して、Xの意識は『異界』に『潜航』する。Xの視覚は私の前にあるディスプレイに、聴覚は横に設置されたスピーカーに繋がっている。肉体と意識とを繋ぐ命綱を頼りにたった一人で『潜航』するXの感覚を受け取ることで、私たちは『異界』を知る。

——かくして、今日の『潜航』が、始まる。

「Xは、結局、あの少女がどうしようとしていたのか、わかっていたのかしら？」

「私には、人のことは、何ひとつ、わかりませんよ」

「それにしては、随分確信に満ちた物言いをしてたけど」

「確信はしていません。ただ、経験上、そう考えるのが自然であろう、という想定を、言葉にただけです」

「あなたにも、似たような経験があるの？異端として追われること。魔女と認定されて狩られること。そうでなくとも、現実には、社会に、排斥されるようなこと。まあ、そういう意味では、今がまさにそうなのかもしれないけれど」

「私は、それだけのことを、しましたからね。現行法と、社会の倫理に照らし合わせ

ても、当然の帰結です」

「でも、やめなかったのね」

「そうです」

「あなたは馬鹿ではないのだから、わかっていなかったわけではないでしょう。殺人を繰り返せば、いつか捕まることも。裁かれることも。……死刑になる、ことだって」

「もちろん」

「どうして、やめられなかったの？ 少なくとも私の目から見る限り、あなたは、極めて理性的に見える。一時の感情に流されるようにも、見えない」

「お話ししたところで、理解は、多分、できませんよ」

「それでも、気になるわ」

「その時、その人を殺したかったから。それ以上でも以下でも、ありませんよ」

なんでもない日のXと私

2023-02-25 / ぺらふえす 2023 書き下ろし

シアワセモノマニア
<https://happymonomania.com/>

青波零也 Aonami Reiya
aonami@happymonomania.com
 Twitter: @aonami



無名夜行

Proof of Alice's Existence

とある魔女の寛容

「お久しぶり、旅人さん。今日
はとってもいい天気ね」

声が頭上から降ってくる。X
が視線を上げれば、彼の視界と
接続されているディスプレイに
は、雲一つない晴れ晴れとした
青い空を背景に、箒に乗った女
性が映し出される。

「こんにちは。お久しぶりです」
言葉を返せば、箒が下りてき
て、女性の姿がXの視界にはっ
きり映し出される。風に靡く長
い黒髪、ほっそりとした、それ
でいてメリハリのある身体のラ
インを浮き上がらせる黒いドレ
スに、黒い大きなとんがり帽
子。絵に描いたような「魔女」
を体現した女性は、Xを真っ直

ととんがり帽子の魔女はあっけ
らかんと笑った。ただ、その笑
顔は明らかにこの場には不釣り
合いだった、と言えよう。

Xは視線を魔女から元々見て
いた方向に戻す。松明を持つ群
衆に囲まれた、木組みの台。そ
の上に立てられた柱には、一人
のみすばらしい姿をした少女が
縛り付けられている。Xの聴覚
と接続したスピーカーから聞こ
えてくるざわざわとした声は、
どうも『こちら側』の言語では
ないのか、内容を聞き取るこ
とはできない。ただ、少女を取り
囲む群衆の間に緊張と怒気、そ
して恐怖が満ちているのは、彼
らの表情や声から如実に伝わっ
てくる。

隠し切れない呆れを滲ませた声
でXは言葉が続ける。
「もしもそれが『本物』であつ
た時、火をかけても殺せないよ
うな相手を、どのように処刑す
る気だったんでしょう。私に
は、まるで想像できません」
魔女はその言葉を受けて、か
らからと軽やかに笑った。

「そうね、旅人さんの言うとお
り。処刑人さんも、見てた人た
ちも、呆気にとられてね。それ
からはみんなして大騒ぎ。どう
やって私を処刑するのか、そん
なこと考えてる前に魔法で復讐
されるんじゃないか、って」
「それで、復讐はしたんですか」

ぐに見つめて、にっこりと笑つ
てみせる。

魔女。そう、この女性は見た
目通りの魔女なのだ。
なお、この場合の「魔女」と
は、単に「魔法の使える女性」
を示す言葉ではない。

そもそも「魔法」という言葉
自体が「異界」を観測する我々
には定義しがたいものだ。『潜
航』の中で『こちら側』では起
こりえない数々の不可思議をX
の視界越しに観測してきたが、
『こちら側』ではあり得ない現
象も、その『異界』の中では当
然のものであり、「起こりえな
いこと」を示す「魔法」という
言葉は相応しくない。

また、一様に縛られた少女に
意識を向けているからだろう、
彼らはこの場において明らかに
異質な存在であろうXと魔女に
気づいた様子ではなかった。

そんな群衆の熱が伝わるざわ
めきの中に、いたって涼やかな
魔女の声が割り込んでくる。
「魔女狩り。旅人さんの世界に
もあつたのかしら？」
「はい。私は、歴史の授業で習つ
た程度ですけど」

魔女狩り。異端の魔女と認定
された者をことごとく裁き処刑
する、『こちら側』において大
きな負の歴史として語られてい
るそれは、どうやらこの『異界』
にも蔓延っているようだ。
「そっか、旅人さんの世界では

「しないわよ。旅人さんは私を
何だと思ってるの。一張羅を燃
されたのは確かにむっとしたけ
ど、慌てふためく人たちを見た
らどうでもよくなっちゃって、
ね。だから、お互いの平穩のた
めに、私が故郷を離れることに
したの。私は、魔女だけど悪魔
じゃないからね」

つまるところ、超越者の余
裕、というわけだ。誰ひとりと
して自分を傷つけることはな
い、そして大事なものを傷つけ
ることもない、という自信。そ
れが、彼女のおおらかさを確固
たるものとしている。ディスプ
レイ越しに彼女を観測する私に

ただし、幾度にも渡る「潜航」
の中で、魔法と呼ぶべきものが
無かったわけではない。

それこそが、『異界』を渡る
ものの持つ力だ。

我々はXの意識を『異界』と
接続する、という形で限定的に
『異界』を観測している。も
し、人間を肉体ごと『異界』に
送り込み、自由に渡り歩く技術
が確立されればこのプロジェクト
も次のステージに至るのだろ
うが、実現にはほど遠い。

だが、Xを通して『異界』を
観測するようになって、否応な
く理解させられたことがある。
それは、我々がその方法を確
立できていないだけで、『異界』

歴史で語られるくらいには過去
の話、ってことね。うらやまし
いわ。私の故郷はとっても魔女
狩りが盛んでね、魔女だ、って
認定されると、それはもう面倒
なことになったのよ」

「あなたも？」
「うんうん、当時は本当に大変
だったの。『火をかけて、焼け
死んだら無実、生きてたら本物
の魔女』なーんてめちゃくちゃ
なこと言われてね。私はともか
く、せっかくの一張羅が黒焦げ
のポロポロ。困っちゃった」

明るい口調でとんでもないこ
とを言うが、何せこの女性は本
物の「魔女」だ。箒に乗って空
を飛び、隔てられているはずの
世界を自由に渡り歩き、『こち

は、そのように思えた。
「でも、あなたのように、誰も
彼もが寛容なわけ、ないですよ」
「そりゃそうね」

魔女はそう言って、その炎の
色をした双眸を、台の上の少女
に向ける。Xもまた、魔女の視
線を追うように首を巡らせる。

木組みの台を取り囲む群衆は
今まさに少女に向けて松明を投
げ込もうとしていた。この、と
んがり帽子の魔女がされたのと
同じように、火にかけようとし
ているに違いない。

しかし、己の運命を知りなが
ら、少女はうつむくことすらせ
ず、己を取り囲む群衆を見据え

を自由に渡り歩く者は確かに存
在する、ということだ。それぞ
れの『異界』のルールに縛られ
ることなく、全てを超越した、
まさしく魔法のごとき力を操る
者、「魔女」と呼ぶべきものが。

彼女はそんな「魔女」の一人
である。数多の『異界』で幾度
もXと顔を合わせてきた、あら
ゆる世界を渡るもの。
「旅人さんも、また変なところ
に顔を出すわね。こういう見世
物はお好きな方？」

「いえ、好きか嫌いかで言うな
ら、間違いない嫌いな方です。
しかし、私は、赴く場所を選べ
ないので」

そういえばそうだったわね、

ら側』の医学では治療不可能な
傷を癒し、時には死すらも超越
する。火をかけられた程度でど
うこうなるわけがない、といえ
ばそうなのだが。
「……しかし、どうにも、馬鹿
げた話ですね」

珍しく辛辣なXの物言いに
「どういうことかしら？」と魔
女が問い返す。Xは台の上の少
女を取り囲む群衆から、きよと
んとした表情の魔女に視線を移
して、言う。

「人間であれば死に、魔女であ
れば生き残るということは、つ
まり、火をかけた結果『本物』
を引き当てる可能性を、まるで
考慮していない」

どこまでも淡々としながら、
ている。その視線は凜として、
引き締められた口元にはうっす
らと笑みすら浮かんでいるよう
に、見えた。

傍らに浮かぶ魔女の小さく笑
う声がスピーカーから聞こえて
きたかと思うと、いたずらっぽ
い声が続く。

「ねえ、旅人さん、賭けてみな
い？ ああ『お仲間さん』が、
生き残るか、否か」

Xは深く溜息をつく。

「それでは、まるで賭けになり
ませんよ。あの少女が『火をか
けた連中に復讐するか』、あた
りが妥当かと」

「それはいいアイデアね」